

フィッツジェラルド『夜はやさし』での役割論

薬学部第2 英語 大野 真

『夜はやさし』(*Tender is the Night*) は、『グレート・ギャツビー』で有名なアメリカの小説家 F・スコット・フィッツジェラルドの長編小説である。統合失調症の女性患者と結婚した精神科医の物語であるこの小説は、美しさとも悲しさを併せ持つ独特の魅力にあふれている。

作家の村上春樹はフィッツジェラルドのファンとして知られ、『グレート・ギャツビー』その他の作品を自ら翻訳しているが、フィッツジェラルドの魅力に取りつかれたきっかけの一つとして、結婚後に『夜はやさし』を読んだことを挙げている(村上春樹のエッセイ「フィッツジェラルド体験」参照)。興味深いことに、1 回目はこの作品を読んだ時にはそれほどの感動を覚え、それから何か月かが過ぎた後、突然この作品を再読したい思いに駆られて読み直したとのことだ。「何か月かが過ぎた。そして突然何かかやってきた。説明することなんてできない。僕は本棚からもう一度『夜はやさし』をひっぱり出して貪るように読み始めた。今度は感動がやってきた。それはこれまでの読書体験では味わったこともないような感動だった」(「フィッツジェラルド体験」10)。

村上春樹は大学在学中に学生結婚をし、その後ジャズ喫茶を経営し、店を開く際に借りた借金を返済するために毎日必死になって働いた。そのような「生活の重み」—生活者としての苦労を身に染みて味わう経験を経るさなかで、『夜はやさし』を読んで深く心を打たれ、フィッツジェラルドの魅力を再発見するに至るのである。

『夜はやさし』は、青春時代の後に生活者としての苦労を味わった者の心をとらえるような、光と影の陰影に富んだ魅力を持つ作品である。青春期には或る意味で無責任な自由さがあるが、生活者は様々な役割という重荷を背負っていかざるをえない。『夜はやさし』の主人公ディック・ダイヴァー(Dick Diver)も、精神科医として、さらには患者の夫として、また家庭の父親として様々な役割を引き受け、しかもそれらの役割の間の相互矛盾の中で葛藤した。

本論考ではそのようなディックの葛藤を役割論の観点から考察してみたい。

1. ローズマリーの憧れの対象としてのディックの役割—謎の始まり

『夜はやさし』の第1部は、南仏リヴィエラの海辺にある夏の避暑地から始まる。その地に母親と一緒にやってきた少女ローズマリー・ホイトは、海辺で出会ったディックを好きになる。「あなたを初めて見たときに恋におちたの」(31)とローズマリーがディックに告白したように、それは一目ぼれのような恋である。そのときローズマリーは18歳頃。これから人生が花開きつつある年齢であり、彼女の「ロマンティックな目」(38)が将来への希望を物語っている。

一方、ローズマリーが一目ぼれしたディックは、大人の男性としての魅力を備えている。外見は「非常にハンサム」(12)であり、人柄も「親切で魅力的」(16)である。そうしたディックに対してローズマリーは憧れの気持ちを抱く—「ひそかに彼女は彼にあこがれた」(19)。この第1部において描かれたディックは、若きローズマリーの憧れの対象としての役割を物語の中で担っているのである。

ところで、若い女性であるローズマリーが年上の男性であるディックに対して憧れるのは、彼女がそれまでに送ってきた人生が限定された閉じた世界の中であつたことも関係している。ローズマリーの職業は映画俳優である。彼女がそれまでに知っていた男性たちは、男優や監督やダンスパーティでの男の子たちのような、限られた狭い世界の者たちであつた(19)。ディックはそうした男性たちとは異なる魅力を持っており、ローズマリーにとって新しい世界の可能性を開くものだったのだ。「彼[ディック]は親切で魅力的に思えた—その声は、ディックが彼女のことを気にかけていて、しばらくしたら彼女のために新しい様々な世界を丸ごと開き、素晴らしい可能性を次々と無限に展開してくれることを約束していた」(16)。

ところで、ローズマリーがそれまでに暮らしてきた世界の中で、母親が占めていた重要な地位も見逃せない。母親はローズマリーにとって「親友」ともいえる存在で(12)、ローズマリーは何事も母親に相談し、母親は彼女に大きな影響を与えていた。「お母さんは完ぺきよ」(37)という言葉に表れているように、ローズマリーも母親を信頼して頼り切っていたのである。とくに映画女優というローズマリーの仕事の面でも、母親が仕事に関する事柄を決定しており(24)、母親の存在は大きかった。母親はローズマリーに対して、女性にとって結婚よりも仕事の方が大事であると教えていたが(40)、ローズマリーの仕事において母親の占める重要な地位を考えると、ローズマリーの仕事も母親との関係という閉じられた世界の枠内に収まっていたように考えられる。

ローズマリーのディックに対する恋は、母親との関係という狭い世界から脱却する意味合いを持っている。最初のころはローズマリーもディックに対して「あなたは私が今までに出会った中で一番素晴らしい人だわ—お母さんを別にすればね」(38)などと言っていたのだが、ローズマリーとディックの恋が進展するにつれ、母親との関係と対立するような描写が見られるようになっていく。例えば、ローズマリーがディックとの恋に夢中になり、母親の不在をさみしく思わなくなったことに対して良心の呵責を感じたり(76)、あるいは、ディックの方も、ローズマリーが会話の中で母親のことを引き合いに出すのを疎ましく感じるようになるのである(84)。

さて、ローズマリーのディックに対する恋を複雑なものにしているのは、ディックが既婚者であり、ニコルという妻がいることだ。

ニコルは当時24歳で、18歳のローズマリーにとって、大人の魅力を持つ女性に思える。ニコルは、ローズマリーの知る限り最も美しい女性の一人である(33)。しかもニコルはその内面に何かしらの力「予測できないほどの力 an incalculable force」(60)を秘めた存在だ^{注1}。また、出身階層でも、ローズマリーが中産階級の出身であるのに対し、ニコルは自力で財を築いた資本家の孫娘である(53)。

そして、ローズマリーは自分と対比的な女性であるニコルに魅力を感じ、ディックに対してと共に、その妻であるニコルに対しても憧れを抱くのである。ローズマリーは母親のひざ元で泣いて告白する。「お母さん、あたし、あの人[ディック]を好きなの。どうしようもなく好きになってしまったのよ—誰かに対してこんな気持ちになるなんて、これまで思いもしなかったわ。しかもあの方は結婚していて、あたしは奥さんのことも好きなのよ—どうしようもないわ。ああ、本当にあの方が好き！」(22)。さらに、ローズマリーはディックに対しても、「私はあなたとニコルの二人とも愛しているの」(63)と告げるのである。

ローズマリーのディックに対する恋は、ディックとニコルという夫婦関係に対する関心と切り離せない。例えば、ローズマリーはディックとニコルの秘密の愛の会話（「君が欲しいんだ」「4 時にホテルで待っているわ」）を偶然耳にして、激しい興味をそそられる（54）。この秘密の会話の場面が示唆するように、ディックとニコルの夫婦関係は、ローズマリーにとって大きな謎として現れるのである。

この小説の第 1 部では、ディックとニコルの夫婦関係の謎について、様々な伏線が張られている。例えば、ディックはローズマリーに対して次のように語る。「君は僕とニコルとの関係が込み入っていることを分かっていると思う。彼女はあまり強くない—強そうに見えるけれども強くないんだ。これが少々厄介のモトなんだ」（76）。また、ディックは医師であるが、現在は医師の仕事をしていないことも、第 2 部以降で語られるディックとニコルの関係の伏線になっている（62-63）。

そして、第 1 部での最も重要な伏線は、小説家マックスコーとフランス人トミー・バルバンとの決闘事件である。この決闘自体はとくに怪我人なしで終わるのであるが、決闘の原因となったのは、マックスコー夫人が偶然目撃したニコルの秘密を話そうとして、ニコルに好意を抱くトミーが強く反対したことだ（43）。

この決闘の原因として示唆されたニコルの秘密は、第 1 部の最後の場面で、物語の表面上に表れる。浴室において、狂気の発作に駆られたニコルは、ローズマリーのいる前でディックに対して以下のように叫ぶのだ。「あなたなのよ！—あたしがこの世界で持っているただ一つのプライバシーに入り込んできたのはあなたなんだわ」（112）。

このようにして、それまで隠されてきたニコルの統合失調症が明らかになる。医師であるディックにとって、ニコルは妻であると共に患者でもあったのだ。こうして物語は第 2 部（過去におけるディックとニコルの出会い）へと続いていく。

『夜はやさし』には二つの版（初版と、作者の死後に出版された改定版）があるが、ローズマリーのディックに対する恋から始まるこの版（初版）は、ローズマリーのディックへの憧れの気持ちを、ディックとニコルの夫婦関係の謎に対する関心と重ね合わせており、ミステリー小説のような雰囲気も漂わせている。

ここにおける謎は、若いローズマリーにとって、大人の人生が秘めている未知の深淵を示唆するものである。こうした人生の深淵の謎は、ニコルの狂気という秘密が表面上明らかになったから解消されるというものではなく、この先の第 2 部において物語を過去の時点に遡り、医師ディックと患者ニコルとの出会いから結婚に至る過程を描くことによって、さらに探究することが必要になってくるのだ。

この版での第 1 部は、ローズマリーのディックに対する憧れの気持ちとディックとニコルの関係の謎という光と影の両面を、18 歳の若き女性ローズマリーの視点を中心に描いており、人生の奥深さを感じさせる効果的な構成になっていると思う^{注2}。

2. ニコルに対する医師かつ父親代理としてのディックの役割

この小説の第 2 部は、第 1 部よりも過去の時点に遡り、ディックとニコルとの出会いから結婚に至る過程を中心に描く。

第2部の冒頭は、第1次世界大戦中の1917年の春、26歳の若きディックがチューリッヒに来る場面から始まる(115)。ディックは大学時代に「幸運なディック lucky Dick」(116)というあだ名で呼ばれていた、前途有望な精神科医であった。そして、チューリッヒで医学博士の学位を取得した後、フランスで軍隊の精神科に勤務し、終戦後の1919年春に除隊してチューリッヒに再び戻ってくる(117-118)。

チューリッヒはスイスの心理学者・精神医学者であるユングが活躍した場所であり、また、第1次世界大戦は、シェルショックの患者の分析によって、フロイトがその精神分析の学説をさらに発展させるきっかけとなったものである。このような時代背景との関わりも興味深い。

ディックの場合、友人の医師フランツから「戦争中での君の経験を話してくれ」と尋ねられた時も、「僕は戦争を全然目撃しなかったんだ」と答えており(119)、直接的な戦闘参加体験があるわけではない。しかし、戦争の持つ死と暴力のイメージは、この作品の表面に描かれる性と愛の世界の裏面にあるものとして随所に影を落としており^{注3}、或る意味で、ディックにとってはこの後のニコルとの関係が1つの戦い―戦争であったとも言えるかもしれない。

さて、ディックは戦時中のチューリッヒにおいて若い女性患者であるニコルと知り合い、フランスにいる間は彼女と文通し、終戦後に再会する。ニコルは「ディックがそれまでに見た中でおそらく一番美しい少女」(120)であり、ディックは患者に対する医師である以上に、1人の男性としてニコルに関わっていく。ニコルの方も、若い少女らしく年長の男性ディックに対して甘えるような様子もあり、ニコルがディックに対して書いた手紙の中には、「足長おじさん Daddy-Long-Legs」宛に書いたような調子のもも見受けられる(121)。

ニコルの精神病の症状において注目されるのは、父親であるウォレン氏との関係である。ドムラー医師に相談に来たウォレン氏の話の中で、この父親と娘のニコルとの関係が物語られている。

まず、ニコルが11歳の時に母親が死に、ウォレン氏がニコルにとっていわば「父親と母親の両方」のような存在であったこと(126)、或るときニコルが従者に言い寄られたという妄想を抱き、それ以後も男性たちに襲われるという考えを抱いて発作を起こすようになったこと(127)、である。

医師の診断としては「精神分裂病(統合失調症)」で「男性恐怖症」ということだが(128)、それについては次のようなウォレン氏の話が鍵となる。「人々は私たちがなんて素晴らしい父と娘だろうと言ったものです―そして涙をぬぐったものです。私たちはまさに恋人のようでした―そして実際に恋人となってしまったのです」(129)。

こうしたウォレン氏の告白を聞き、ドムラー医師はウォレン氏が娘から離れていることを条件にして、ニコルの治療を引き受けることにしたのである(130)。

治療中にドムラー医師はニコルにフロイトを読むように勧めたりもしているが(131)、精神分析における「エレクトラ・コンプレックス」的な父娘間の恋人的感情がニコルの心の病と関連していることが注目される。

さて、こうしたニコルに対してディックは医師として関わっていくが、その際、ディックが女性に対して魅力的な男性であることが大きな意味を持ってくる。(友人の医師フランツも、「君は女性に対して魅力的だからね、ディック」(131)と言い、その魅力を認めている。)つまり、ディックとニコルとの関係は、単なる医師と患者の関係ではなくて、男性と女性との恋愛関係になってお

り、さらにニコルが父親に対して恋人的な感情を抱いていたことがその症状の要因と見なされるのを考慮すると、ディックはニコルに対して医師かつ父親代理的な役割を担っていると言える。

ところで、こうした医師かつ父親代理的な役割は、エレクトラ・コンプレックス的な病因を持つ神経症の患者の治療において重要である。フロイトは『精神分析入門』の第27講「感情転移」で、患者が医師に対して特殊な関心を寄せ始めること（362）、とくに若い娘の患者と比較的若い医師の間に恋愛感情のようなものが生じること（363）を指摘している。

フロイトは、このように「医師という人物へ患者のいろいろな感情が転移され」る事実を「感情転移」と呼ぶ（365）。感情転移において重要なポイントは、医師との関係において患者が示す感情（愛情や敵意）が、過去において他の人物に対して患者が抱いていた同様の感情の再現・反復だということである。フロイトは次のように述べている。「むしろわれわれは、このような感情の動き全体はどこかよそですでに予め準備されていたのであって、それが分析的治療を受ける機会に医師という人物へ転移されると推測するのです」（365）。「われわれは患者に対して、君の感情は現在の状況から生じたものでもなければ、医師の人格に当てはまるものでもなく、君の心の中にかつて起ったことの反復であるにすぎないということを教えて、こういう感情転移を克服するのです」（366）。

感情転移は、神経症患者の治療を成功させる上で役立てることが出来る。例えば、父親に対する恋愛的感情が病因である場合に、そうした過去の感情を現在における医師に対する感情の中で再現させて、克服するのである。しかし、そのように治療を成功させるためには、医師自身が患者に対する恋愛的感情に没入することなく、一定の距離を置くことが重要であろう。

ディックの場合は、ニコルに対してそのような客観的な感情的距離をとることが出来ず、むしろニコルとの関係に深く絡め取られていく。そして、患者であるニコルと結婚するという困難な道を歩んでいくのである。

3. ニコルに対する医師かつ夫の役割—矛盾と崩壊へ

『夜はやさし』でのディックとニコルの関係の特徴は、ディックが患者であるニコルと結婚し、ニコルに対する医師かつ夫という二重の役割を引き受けることである。

ディックはニコルへの恋愛感情が深まり、結婚を考えるようになるが、結婚後の関係が困難なものになるであろうことについても、友人の医師フランツから忠告を受けている。「なんだって！それじゃあ自分の人生の残りを医師かつ看護役かつその他一切のことをするために捧げるというのかい—うまくいかないよ！」（140）。また、医師と患者の結婚の難しさを自分自身も予感し、次のように自問している。「…ダイヴァー医師が精神病患者と結婚するだって？ どうしてこんなことになったんだろう？ どの時点から始まったことなんだろう？」（156）。

けれども、結局のところディックはニコルとの結婚に踏み切り、夫婦の間には子供も二人生まれる。（第1部で描かれた、ローズマリーの視点から見たディックとニコルの姿は、結婚後のものだ。）

しかし、ニコルに対する医師かつ夫という役割は、矛盾を抱えた困難なものであった。

困難さの理由としては、まず、精神科医としてのディックの仕事がニコルの問題と絡み合ってしまうことが挙げられる—「彼の仕事がニコルの問題と混同してしまうようになった」（170）。また、精神医学について本を書くにあたっては実際の患者との臨床的な接触が必要だとフランツが語った

時に、ニコルは笑いながら、「ディックには私がいるわ。一人の人間が扱う精神疾患としては十分だと思うわ」と言うのである（176）。

そして、夫かつ精神科医としての役割は、だんだんとその矛盾を強めて、ディックの能力を奪っていく。「彼女〔ニコル〕に対する彼の見方における二重性（dualism）一夫としての見方と精神科医としての見方―は、徐々に彼の能力を麻痺させつつあった」（188）。

ニコルの心の病も改善せず、観覧車のある所でヒステリックに笑い続けるといった、統合失調症の発作を起こす（189）。けれども、ディックはニコルの狂気をいかんともすることができず、彼女を助けられない。「しかし、ディックとニコルは、対となり補い合う存在というよりも、一体化した等しいもの（one and equal）になってしまっていた。彼女は骨の髄までディックそのものであった。彼はニコルの精神の崩壊と一緒に加わることなく観察することができなかった」（190-191）。

「医師かつ夫」という二重の役割は、医師としての客観的な視点から冷静に距離を保ってニコルの症状を見ることをできなくし、ディックを無力化させていくのである^{註4}。ディックは夫としても医師としてもニコルを救うことが出来ず、車内で発作を起こしたニコルが叫びののしりハンドルに手を出したために、車をぶつけて壊してしまうのだ（192-193）。

さて、ここで、「医師かつ夫」というディックの役割について、役割論の立場からあらためて考察してみたい。

哲学者の廣松渉は、『世界の共同主観的存在構造』において、人間が生きていく中で果たす様々な役割について次のように述べている。「人びとは、日常的思念においては、『人格』なるものをとかく実体化して考えがちである。しかし、“人生劇場”の“俳優”たるわれわれは、厳密に言えば『本来的自己』なるものをもたない。（中略）社会という人生劇場においては、学校ではリベラルな教師として、家庭では亭主関白として……というように人は必ず一定の役割を演じているのであるから、つまり『舞台外の生活』がないのであるから、『自己としての自己』と『俳優としての自己』とのレアルな区別は成り立たない」（161）。そして廣松は、人間には実体的な本質はなく、「各人はその都度の役柄においてしか実存しない」と断言する（162）。

廣松がこの文章を書いたのは1970年のことであるが（そのため「亭主関白」と言った古い表現が出てくる）、ここに表れている廣松の人間観は、作家の平野啓一郎が最近提唱している「分人」主義の人間観と共鳴するように思う。

平野は、高校時代の友人を相手にした場合や大学時代の友人と一緒にいる場合、さらには仕事関係の相手の場合や家族に対する場合など、相手次第で自然と様々な顔を持つ自分になりきってきた実体験に注目し、人間は唯一無二の「（分割不可能な）個人 individual」ではなく、複数の「（分割可能な）分人 dividual」である、と考える（36）。そして平野は、「分人はすべて、『本当の自分』である」と強く主張する（38）。このように平野が言うのは、唯一無二の「本当の自分」という幻想に縛られるために受けている多くの重圧から我々を解放するためである。

以上挙げた廣松や平野の人間観は、我々が様々な状況に応じて演じる多面的な役柄に注目し、一つの役柄のみを「本来的自己」や「本当の自分」として絶対視しないように戒めている点で非常に興味深い。

さて、役柄という視点からディックのここまでの物語をあらためて振り返ってみたい。この小説

の第1部で描かれているのは、若い女性ローズマリーの憧れの対象としてのディックであり、第2部ではニコルに対する医師かつ父親代理としてのディック、さらには医師かつ夫としてのディックが描かれている。このように、ディックは様々な側面や役割をもった存在である。

しかし、ディックの見せる様々な側面—「分人」—にはお互いに矛盾してしまうものがあるように思う。まず、医師かつ父親代理としての役割は、医師が患者に対する恋愛的感情にとらわれてしまった場合には失敗に終わるものであるし、とくにディックが選んだ「医師かつ夫」はお互いに両立が難しい役割であり、患者かつ妻であるニコルに対して治療上必要な距離を保つことを困難にし、結果的にニコルを治癒させることができず、ディック自身もニコルの狂気と一体化して、医師としての能力を奪われてしまう。医師かつ夫としての二重の役割はディックを絡め取って無力化してしまう役割であり、「分人」が持つべき開放的な多面性を失ってしまっている。ディックは相互矛盾した役割の間の葛藤の中で生活を崩壊させていくのである。

この小説の第2部の後半から第3部において語られるのは、ディックがそれまでに担っていた様々な役割（「ローズマリーの憧れの対象」や「有能な医師」や「ニコルの夫」など）を次々と失っていく崩壊の過程である。

4. 役割なしのディック——放浪者へ

第2部の後半からは、ディックにとって痛ましい喪失の過程が物語られる。

まず、ディックの父親が亡くなる。ディックは父の葬儀のため故郷に帰り、墓地で父親、そして父親を含めた祖先たち皆に別れを告げる。「さようなら、お父さん—さようなら、僕の父親たちみんな (good-by, all my fathers)」(205)。

その後、ローマでディックはローズマリーに再会する。リヴィエラで初めて二人が会った頃から約4年の時が経ち、ローズマリーは18歳から22歳になり、ディックも34歳から38歳になっている。ローズマリーはその間に男性との経験を積んだらしく、彼女が自ら言うように、少女から一人の女性 (a woman) へと変化している。「あなたと出会ったとき、私は幼い少女に過ぎなかったわ、ディック。今では私は女なのよ」(209)。

また、ローズマリーの成長と共に、ディックとの関係も以前のように甘いロマンティズムを漂わせたものではなくなっている。「18歳は34歳を思春期に立ち込める霞を通して見るかもしれない。しかし、22歳は38歳を分別のついた明晰さをもって見るものだ」(208)。つまり、「ローズマリーの憧れの対象としてのディック」という役割は失われていくのである。

結局のところ、ローズマリーとディックの情事も苦々しいものになり、ディックはローズマリーに対して「僕は黒死病のようなものなんだ。もう人を幸せにすることができないのかもしれない」(219)と告げる。そして、酒に酔ったディックはイタリア人の運転手とのいざこざをきっかけに警官を殴打して、一時的に投獄される事件を引き起こしてしまうのだ。

さらに、第3部でディックの転落の物語は続く。

ディックはもはや職場で真面目な人間とは見なされず、さらに飲酒癖も悪化して、医師という職業上の倫理観もぐしゃぐしゃに崩れていく (256)。「有能な医師」としての役割も失うのだ。

そのようなディックの様子を見て、ニコルは「あなたは以前は物事を創り出そうとしていたわ—

けれども、今ではこなごなに壊してしまいたいみたい」(267) と言うのである。そして、もはや若さも往年の体力も寛容さの魅力もなくしたディックの姿を浜辺で目にしたニコルは、ディックから離れる決心をし、トミー・バルバンとの情事を行う。ディックとニコルは別れ、「ニコルの夫」としての役割を失ったディックは家族のもとを去り、その後は各地を転々とする人生を送ることになる。

このようにして、ディックはそれまでに自らが担ってきた様々な役割—「ローズマリーの憧れの対象としての役割」、「有能な医師としての役割」さらには「ニコルの夫としての役割」や「家族における父親としての役割」—を次々に失っていく。

しかし、こうした喪失の過程は悲劇的で切ないものではあるが、妻のニコルやディック自身の双方にとって或る意味で自立や解放の過程でもあったようだ。ニコルはディックから離れる決心をしたときに、「新鮮で幸福な気持ち」になり、「自分は彼なしでも自立していけるのだ」と考える(289)。そして、トミーとホテルで過ごした後には、「それまでにディックが彼女に教え込んできたもの一切が刻々と脱げ落ち、本来の自分の姿に近づいていく」のである(298)。

一方、ディックの側も、ニコルからトミーとの情事を告げられて、自分たちの夫婦関係が終わったことを悟るが、それは医師かつ夫としての困難な役割からディックが解放されることも意味している。「治療は終了した。ダイヴァー医師は自由になったのだ The case was finished. Doctor Diver was at liberty」(302)。

ディックがニコルの「医師かつ父親代理」さらには「医師かつ夫」という矛盾した役割を一身に引き受けて自らを崩壊させることによってのみ、ニコルの自立という治療行為が可能になったと言えるのかもしれない。

こうしてディックはそれまでに自分が担ってきた役割を全て失い、一人の人間に戻る。

ディックと別れたニコルは「ディックは最初の6年間私にとって良い夫だったわ」(312)と姉に語り、また、「私はディックを愛していたし、あの人のことは決して忘れない」(314)と新しい夫のトミーにも言う。これらの言葉は、一人の人間としてのディックが愛すべき資質を持つ人物であることを示唆している。しかし、小説の結尾で語られる、ディックのその後の人生についての消息は、各地を転々とする放浪的なものであり、読者は深い哀切を覚える。様々な役割から解放されることは、自由でもあるが、根無し草の哀愁も持つ^{注5}。

我々が生活者として味わう苦勞の多くは、様々な役割を担うことから由来する。ディックは医師かつ夫という矛盾した役割を身をもって引き受け、その葛藤の中で自らを崩壊させて、結果的に全ての役割を失うに至った。しかし、その崩壊の過程は、役割を担って生きることの光と影を描き出しており、読者に深い感銘を与えるのである。

【注】

1. 第2部で描かれているように、ニコルは言語の才能に恵まれ、英語以外に仏独伊語なども話し(142)、音楽にも強い関心がある(142,152)。ニコルの狂気には、彼女の秘めた才能や力も関係しているのかもしれない。なお、狂気と生命力(vitality)との関係については、フィッツジェラルドの妻ゼルダ(『夜はやさし』のニコルと同じく統合失調症だった)の生涯を素描した村上春樹「ゼルダ・フィッツジェラルドの短い伝記」を参照(148,188)。

2. 初版に比して、文芸批評家マルカム・カウリーが編纂し直した改訂版では、全体が時間の経過に従って5部に分割された構成になっている。二つの版の比較については、野崎孝編『フィッツジェラルド』や村上春樹『『夜はやさし』の二つのヴァージョン』参照。なお、村上春樹が最初に読んだのは改訂版の方だ（『二つのヴァージョン』136）。
3. 戦場の塹壕跡を訪れたディックが口にする「愛の戦い a love battle」（57）という言い回しは、愛と死の両面を示している。
4. 他者の苦しみに共感して重荷を分かち合おうとするディックの欲求が社会の中での男性としての役割と葛藤することを、ジョナサン・シフは指摘している（119）。シフは『夜はやさし』を女性的な価値を支持した作品と見なしているが（137）、こうした他者への共感能力は、男性に求められる戦場の兵士のような非情な役割との間に葛藤を生むものであろう。
5. 『夜はやさし』がディックの放浪的生活で終わることは意義深い。デーナ・ブランドは『夜はやさし』での観光旅行や列車などによる移動の場面に注目し、それらを「安定したアイデンティティーの境界からの離脱」（132）として意味づけている。

【引用文献】

Brand, Dana. "Tourism and Modernity in *Tender Is the Night*." *F. Scott Fitzgerald: New Perspectives*. Ed. Jackson R. Bryer, Alan Margolies and Ruth Prigozy. Athens: U of Georgia P, 2000. 130-41.

Fitzgerald, F. Scott. *Tender is the Night*. 1933. NY: Charles Scribner's Sons, 1934.

Schiff, Jonathan. *Ashes to Ashes: Mourning and Social Difference in F. Scott Fitzgerald's Fiction*. London: Associated UP, 2001.

野崎孝編『20世紀英米文学案内7 フィッツジェラルド』研究社、1966年。

平野啓一郎『私とは何か―「個人」から「分人」へ』講談社、2012年。

廣松渉『世界の共同主観的存在構造』講談社、1991年。（原版は1972年初版、論文初出は1970年。）

ジークムント・フロイト『フロイト著作集1 精神分析入門（正・続）』懸田克躬・高橋義孝訳、人文書院、2000年。

村上春樹「ゼルダ・フィッツジェラルドの短い伝記」『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』中央公論新社、2013年、141-89。

―『『夜はやさし』の二つのヴァージョン』『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』127-39。

―「フィッツジェラルド体験」『マイ・ロスト・シティ―フィッツジェラルド作品集』中央公論社、1981年、5-29。